

二〇一四年度 入学試験問題
一般第一回・帰国児童入試

国語

注 意

- 1 問題は 一・二 の二題あります。
- 2 試験時間は五〇分です。
- 3 答はすべて解答用紙に記入し、解答用紙だけを提出してください。
- 4 受験番号は算用数字で記入してください。
- 5 声を出して読むはいけません。
- 6 試験場の先生の指示があるまで、問題用紙を開いてはいけません。

— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。 —

わが国で「書」といえば、多くの人は小学校や中学校などでの書写教育としての「書道」という言葉を思い浮かべるが、硯と墨、筆と白い紙を連想するであろう。あるいは、もともと書に興味をもっていた人は、書のさまざまな作品を思い浮かべるかもしれない。それでも、手本どおりに書けなかった経験や先生にほめられたことがないといった、いやな思い出が浮かばない人のほうが多いことだろう。それは、小学校以来、うまい字を書かなければならないというプレッシャーを知らずしらずのうちに植えつけられていたからである。

A、書としてのうまい字とはそもそもどういう文字をいうのか。一般には誰が見ても分かりやすい綺麗な文字や手本どおりの文字をいうが、現実にはその概念は人によって異なり、手本もそれを選んだ先生の好みや美意識の違いからさまざまなものがあるのである。「この形こそうまい字」という決まったものではなく、まずは文字を見る人の主観で決まるのである。もちろん、なんでもいいわけではなく、書として多くの人が好ましく思える範疇が存在するとは確かであるが、そうした範疇の理解は、書に親しんでから後にかかわればよいことである。つまり、初めのうち書を鑑賞し楽しむのに、一般にいうようになうまく書ける必要はないのである。周知のとおり、絵画では絵をうまく描けなくても多くの人が美術館に出かけている。陶磁器を楽しむ人は、素直に自分の好みで見えており、必要であれば予算に応じて買うことさえあるだろう。そのため、自分が陶磁器をつくることができるかできないかは一切関係ないことである。書の見方も同じことなのである。先生に押しつけられた字形にこだわる必要はない。うまく書けなかったことと、鑑賞とは別の次元の話である。筆を持って字を書いた経験がなくても書の鑑賞はできるのである。単純に自分の感じるままに書を見ればよいのに、多くの人は、^①誤った先入観、過去の思いにより、素直な鑑賞を妨げられているのである。

B こうした、書の楽しみを損なう傾向にあった「書写」教育が、すべて誤りというわけではない。書の上達に一定の形、昔から実践されている基本となる手本をもって教えることは、今でも重要な教育手段のひとつである。た

だ、それを鑑賞と切り離して教えることがなかったためにさまざまな不都合が起こったのである。それを示すように、幸い過去に書とのいやな思い出がないとか、まったくのかかわりがなかった人々が書と対面した時は、意外と素直に書の鑑賞をはじめめるものである。

C 角度を変えて書を見てみると、書かれた文字だけにこだわらなくても鑑賞はできることに気づくであろう。それは、書をめぐる種々の周辺のものからはじめ、やがて書を楽しむにいたることも可能ということである。そうした手順で書鑑賞の道を歩めば、過去の忌まわしい思いを気にすることはないだろう。たとえば、筆記具、毛筆に注目してみる。今のような筆は初めから存在していたわけではない。文字の遺品の古いものひとつ、紀元前十三世紀頃の中国殷時代の甲骨文字は亀の甲羅にナイフなど、エイリ^①なものでホられた文字である。字形も今のものとは異なり、線は細い直線で構成されている。こうした筆とかかわりがない字であれば、過去の筆とのいやな思い出とは関係なくそれを鑑賞することができるであろう。筆そのものも、筆先がすべて柔らかな毛や硬い毛などで、全体が弾力に^②トんだ現在のようなのは、日本では江戸時代になって以降のもので、それ以前は、正倉院に伝わるような芯は紙でそれに毛を巻いた巻筆が主流であった。そうした筆の歴史に興味をもてば、それらによって書かれたであろう過去の遺墨を新鮮な感慨をもって鑑賞できるはずである。

もつとも、最近は急速なワープロやコンピュータの発達で、鉛筆やボールペンを使う機会すらも減少し、まして万年筆や筆を持って書類や手紙を書くことはほとんど日常生活から消えかかっている。しかし、わが国の歴史のなかでは、自分で筆を持って文字を書くほうが^③アットウ的に長く日常的なことであった。筆を使用した歴史の長さにくらべれば、現在のワープロやコンピュータを使用する状況のほうが特殊な短い時期といえる。

そもそも書は、記号としての文字を書くことから出発している。甲骨文字が

生まれて以降、文字を記録する道具が発達するなかで、三十数世紀にもわたってさまざまな書体がさまざまな素材に遺されてきたのである。それらの書体を、時代ごとに見ても書の鑑賞になる。たとえば、篆書という書体は、秦の始皇帝により統一されたとされ、その後、漢時代には隷書が生まれるなど、書体はいくつもの変遷をみている。それらはしばらくして一般的書体ではなくなるが、はるかに時代を経た現在でもカンバンや印鑑に使用され、生活の場に生きているのである。そこに注目すれば、それも篆書という書体の書の鑑賞をしていることになる。同じ篆書体でも、使われた場所や書かれた場所など地方別に注目してもよい。筆者や製作状況の違いを見るのも鑑賞である。書かれた素材に注目してそれを時代ごと、あるいは同時代の書体を素材別に見るという楽しみ方もあるだろう。さらに素材にこだわれば、そこにある文字は二の次にして、文字のある造形物そのものを楽しむこともできるだろう。

ところで、書を鑑賞する歴史は、字を使いはじめた時からあった。人が字を書かなければならなくなると、必ず先人の書を見て習い、気に入った文字や書きぶりを参考に自分の文字を書くこととするのは、ごく当たり前のことである。今でも、手書きをするとなったら、手本にすべき手書き文字を探してみることだろう。ただし、現代生活では、近くに参考になる手書き文字があるとは限らず、身のまわりにある新聞や本など印刷物の活字などを参考にするしかないだろうが、もし手本を探そうとしたのであれば、その時点で文字に興味をもちはじめたことになる。そして通常の読書においても、それらの活字に対してもっと字が大きかったらよいのにとか、ゴシック体、明朝体がよいとか、もう少しこういう形のほうが自分には快いのだといったように、字形や文字に対して何らかの反応を感じたとしたら、それはすでに④ 行為をはじめたといつてよいのである。もっと見やすい文字にしてほしいということは、そこで自分がよいと思う字形をイメージしているのであり、立派に文字を分析鑑賞しているのである。

現代人は、活字を見慣れており、その字形が基準として頭に残り、誰かの手

問一 傍線部イーホのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄 A ー C に当てはまる語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア だから イ また ウ まして
エ もちろん オ では

問三 傍線部①「誤った先入観」とはどのような先入観ですか。解答欄の形式に合うように、三十字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「書とのいやな思ひ出」とは何ですか。それを具体的に述べた箇所を文中から探し、最初と最後の五字を抜き出しなさい。

問五 傍線部③「新鮮な感慨をもって鑑賞できる」とはどういうことですか。適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 変わった筆に興味をもてば、過去の筆とのいやな思ひ出を忘れて書を楽しむことができるということ。
イ 書と筆とのかかわりに関心をもてば、今までとは違った見方で書を見つめ直すことができるということ。
ウ 筆の歴史に興味をもてば、現代にいたる書のうつり変わりを意識しなくても鑑賞はできるということ。

書き文字を見た時に、無意識のうちに読みやすいか分かりやすいかを活字の字形と比較している。その時そのまま終わらせないで、ほんの少しその手書き文字と活字の比較を頭に浮かべれば、鑑賞に一歩足を踏み込むことになる。

たとえば、ある手書き文字を見て、活字より分かりにくいのが、なぜだか心惹かれるとする。その理由が何かと思うだけでいいのである。その答えのひとつが活字よりすっきりと見えたことだとしてみよう。それは、活字の特性と書き文字の特性の相違からくる。活字は、すべての文字を画数の多少にかかわらず一定の大きさに限定しているために生じている窮屈さがあるのに対し、書き文字の大きさは自由であるために、画数の多少に合わせて造形し、無駄な筆画を見えないように書くことができ、活字よりすっきりとさせることができるからである。

また、活字によって自分なりの字形美をイメージしている人は、古典のようなすっきりとした書き方はせず、活字の特性に似た文字を書くにちがいない。その人の文字は、「活字っぽい」と表現されることだろう。それも、手書き文字のひとつのスタイルであり、現代では書のひとつとしてみるべきであろう。ふとしたことで、さまざまな機会に活字っぽい書を探せば、それは明治時代以降の小説家や詩人、芸術家、そして漫画家などの文字に多いことに気づくはずである。それが近代書の鑑賞のひとつといつてもよいのではなからうか。それらは、活字を使う環境のなかで生まれたものであり、字形美の基準が歴史上のほかの遺墨とかなり異なるとしても、文字として否定するものではない。今後生まれてくる書も含めて、歴史にのこりそうな美意識をもつ文字として多くの人の賛成が得られればよいのである。

こうして、もつとも身近な事象から文字に接触していくことが、書の鑑賞を豊かにするにちがいないのである。

（名児耶 明『書の見方―日本の美と心を読む』）

（注）＊範疇……範囲。わく組み。

エ 書と筆の歴史に関心をもてば、ワープロなどが発達した現代でも手書きの文字の美しさが分かるようになるということ。

問六 空欄 ④ に当てはまる語句を、文中から六字で抜き出しなさい。

問七 傍線部⑤「活字っぽい書」を書くのはどういう人ですか。それが説明されている箇所を、文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

篤史は大学進学のため、父の郷里である高知へ、東京からやってきた。現在は市内の山側にある祖父母の家に下宿をしている。そこからはど近い鯨井町に、同じ年の従兄弟、多郎が住んでいる。

よさこい祭りには毎年たくさんさんのチームが参加する。篤史と多郎は、六年ぶりに復活した鯨井町商店街のチームの主要メンバーとして、祭り当日をむかえようとしていた。

「四年前は、衣装を着て出て行く篤史を見送ったね」

荷物を整えていると、いつの間にか背後に祖母がいた。

「あのときは初めてだったから、踊りきれなかろうかすごく不安だったよ。今年はずっと楽しめるかな」

「多郎と並んで踊るがやってね」

「うん。ふたりして派手な服を着てるけど、ばあちゃん、驚かないように。おれもタローちゃんもがんばって踊るからさ。びったりの呼吸で、みんなにさすが従兄弟同士だねっていわれてるんだ。来年もコンビを組まされるんだろうな」

ぎゅっと詰めてファスナーを閉めていると、演をすすめる音がした。なんだろう

うと思って振り向くと、祖母が

「どうしたの？」

「なんでもない」

「でも」

昨日か一昨日か、祖母がやけにしよんぼりうなだれていたのを思い出した。電気も点けず、台所の丸椅子に腰掛け

の梅干しの出来加減を考えていたと答えたけれど。

「体の具合でも悪いんじゃないの？ だったら無理しなくていいよ。病院は？」

「そんなやない。どこも悪くない。ただね、年取ると……ほら、涙もううなるき」

よさこい祭りの日程は毎年固定でメインの本祭が二日間。八月十日と十一日。前日の九日、十八時三十分より、中央公園の特設ステージにて前夜祭が開かれる。後夜祭は十二日。

前夜祭に出場できるのは前の年に入賞したチームで、その年の受賞も確率として高く、本祭二日間以前後を含めて計四日踊るチームは毎年複数出てくる。心ゆくまでたっぷり踊りたい踊り子にとって、入賞常連チームは具体的なやりがいをもたらす。少なくとも前年度入賞チームは三日間の演舞が約束され、祭りの

踊り」が披露できる。春のボシユウ時期に申し込みの差ができるのは当然かもしれない。

観客にとっても前夜祭は有力チーム初お披露目とあって、期待は熱気となつてステージをいっそう華やかなものへと押し上げる。篤史がひろめ市場で出会った人たちも、「天上天舞」「なつはな」ならばここが今年の初舞台だ。

去年がない鯨井町チームは前夜祭も無縁で、篤史は多郎と昼前に待ち合わせ、なじみのラーメン屋に向かった。祖母からの一万円は大切な祭りのグンシ

キン。一番高いアイスはとんだら、氷あずきが食べたい、白玉つき、そんな話をしながら昼食をとり、公民館での最後の打ち合わせに臨んだ。

二日間のルートの確認と会場から会場までの移動についての諸注意。踊りの待ち時間についての諸注意。マナーの厳守と細かい役割分担の再指示。救急時の対処法、忘れもの、迷子連絡法、などなど。打ち合わせが終わってから衣装の手直しが行われ、篤史たちの別注衣装については最後まで、志織がつきつきりで微調整を加えた。動きが大きいので、踊っているうちにイタミが出そう

で先手を打って補強が加えられたのだ。

再びTシャツに着替え、久しぶりに三雲の家にあがってピザやガスパチヨを食べ、おばさんからくじらのマスコットをもらった。型紙が配布され、自分で作れる人はなんとかしたようだが、婦人会の好意にたよった人も多い。篤史も

祖母は野良仕事で鍛えたこつ指を丸めて、目元を拭いた。エプロンから取り出したティッシュで大きく涙を拭く。

「男の孫は篤史と多郎だけやもん。そのふたりが仲良う並んで踊るらあて。ばあちゃん、感激して涙も出るで。体に気をつけて、ふたりで気張りよ」

そして再びエプロンに手を入れ、折りたたんだお札を篤史に握らせた。一万円札だ。

「多郎といっしょに美味しいもん、食べなさい」

「こんなに。多すぎるよ」

「ふたり分やき。アイスは一番高いの選んで、三段重ねにしない。かき氷も食べて、なんやつけほら、イカの焼いたのも、焼きそばも、冷やし蜜柑も、缶ジュースも、なんでもこれで買っていっしょに食べるがで。ええね？」

押し切られ、ためらいながらもうなずくと、祖母はまたしても涙をすすった。まぶたも瞬く。

情が厚いことはよくわかっている。感激屋であるのもたしかだ。ひよつとしたら篤史の両親が帰省してこないのを気に病んでいるのかもしれない。我が子の晴れ姿に駆けつけられないなど、祖母の常識から大きく外れていることだろう。ふたりとも夏がイソカしいリゾートホテルに關係する仕事のため、今さらなの

に。篤史は刺激すまいと笑顔をつくって、ありがたく一万円札を財布に入れた。

「下においててすぐにタローちゃんに会うから、昼飯もこれで食べるよ」

「やったらもう一枚」

「いいってば。きりがないよ。もう行くね。明日はじいちゃんと仲良く見に来て。待ってるよ」

祖父はまだ元気で、毎日ではないが近所のさつき園芸店に働きに行っている。無口で無愛想ながらも孫の話はちゃっかりしてるようで、園芸店の人にまで呼び止められ、檄を飛ばされてしまった。

徹夜はいけない、ちゃんと寝なさい、明け方の冷え込みに気をつけて、案の定なことを言われながら篤史は荷物を自転車にくくり、坂道をすべりおりた。

纏にくくりつけると約束し、最後の練習に向かった。入念なストレッチの後、明日へのモチベーションをあげるための通し稽古がおこなわれた。ギヤラリーも多く、諸注意の後、明日からの二日間、元気で行きましよう、月島の挨拶でしめくられた。

最高の笑顔で打ち上げ会に臨めるよう、うんと楽しましよう。大きな拍手が日没のグラウンドにいつまでも鳴り響いた。

午後八時三十分。すっかり暗くなつてから、屋台骨とスピーカー、アンプ類を搭載した四トントラックが町工場に戻ってきた。

レンタルしてきたトラックに、同じくレンタルの音響機器を載せたところで、一旦高知港まで走り、出力のテストをすませてきたのだ。予定通りの音が出た

とのことで、そこから一気に地方車の飾り付けに入っていく。

用意していたパネルをどんどん抱え上げ、位置を確認しながら打ち付け、トラックを覆っていく。内側のお立ち台も、座席面もがっちり補強し、細やかな飾りを指示通り組み立てていく。側面は凝った重層構造になつていて、勇

み

は禁物で、すべてが順番通りにすすまなくてはならない。

やがて青い空が広がり、大きな波が寄せて、太陽がかがやき、椰子の木が揺れ、くじらが遊ぶ、カラフルでポップな鯨井町チームの地方車が完成した。午前三時三十五分。

男ばかりの喝采がひとしきりあがった。みんな遠巻きに眺め、ぐるりとひとまわりし、そばによつてすっかり冷たくなったパネルに頬ずりしてしまう。

踊りチームは寝てこいとの太田の言葉で、一時解散となった。カジを含めた何人かは三雲の車に乗り込み、月島も帰った。

篤史と多郎だけはその場に残り、後片付けと仕上げる地方班を見守った。折りたたんだ段ボールの上に座り、蚊取り線香の煙につつまれながら、寝入ってしまったのは何時頃だろう。笑い声と話し声にみじろぎし体の向きを変えると、となりで寝ている多郎にぶつかった。

「おまえら、野宿でもしっかり気持ちよさそうに寝るよな。図体がでこうてぜ

んぜんかわいくないけど」

「記念写真、ちゃんと撮ったで」

「夢は見ましたか？ 見たでしょ。見ましたよね、うちのあれが地方賞をとる夢！」

口々に言われ、起き上がってまぶたを持ち上げるともう夜が明けていた。

空全体がうつすらと白んでいる。出来たてはやはやの地方車はみんなの④が効いたのか、ひとときわキュートに輝いて見えた。

「なあ、あっちゃん、いっしょに神社に行こう。決めちよったき。当日の朝、目が覚めたら真っ先に神社に上がって市内を見渡そうって」

「ああ、行ってこい、行ってこい。おれらの分まで押んで、ついでに顔も洗ってこい。朝飯の差し入れがもうすぐ来るで」

タオルを放り投げられ、篤史としては半ば渋々、追い立てられるようにして駆けだした。

寝起きなので足がもつれる。神社は町工場のすぐ裏だ。よろけながらもなんとか石段をのぼりきると、言われたとおりに柏手かしわでを打って祭りの無事を祈った。顔まで洗わせてもらった。

晴れ晴れしたところで、多郎に手招きされ、篤史は木立の間に立った。

たいして高い場所ではないが、鯨井町の向こうに広がる家並みまで見晴らせる。

八月十日。よさこい祭りの初日。昨夜の前夜祭はどんな盛り上がりを見せたのだろう。

明けてこの空の下、二百近いチームがすべての準備を終えて本番に臨む。カラフルな衣装が街にあふれるのは間もなくだ。

こうしている今でも、耳を澄ませば鳴子なるこの音が風に乘って聞こえてくるような。

「いよいよだね。タローちゃんに最初からずつと引っぱられてここまで来たよ。でも、やってよかった。過去形じゃだめか。これからだもんね」

多郎ははるか遠くの町並みをみつめていた。まぶしそうに目を細める。そし

て言った。

「あっちゃん⑤、おれにとつて、これが最後のよさこいや」

「え？」

「祭りが終わったら、高知から離れる」

何を言われているのか、わからなかった。

「東京に出るんだ。おれ、夢を追いかける。役者になる」

高知から、離れる。誰が？

一番高いアイスを三段重ね、多郎と⑥に、ええね。

ふいに、祖母の言葉が蘇よみがえった。ぎゅつと握りしめていた白いティッシュも。

雲が切れ、太陽の光が降り注ぐ。泣いても笑っても二日間。運が良ければ⑦も一日。

南国の街を彩る灼熱しょうねつの祭りが、今、はじまる。

（大崎 梢『夏のくじら』）

（注）＊地方車……チームの曲を流す先導車のこと。

問一 傍線部イ～ホのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄 A ～ D に当てはまる、体の一部を表す漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問三 傍線部①「祖母がやけにしょんぼりうなだれていた」のはなぜですか、説明しなさい。

問四 傍線部②「案の定なことを言われながら」について。

〔Ⅰ〕誰に言われたのですか、文中から抜き出しなさい。

〔Ⅱ〕「案の定なこと」とはどういうことですか。適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分と同じ考えであること。

イ いろいろとよく気がつくこと。

ウ 言われるだろうと思ったこと。

エ わずらわしいと感じられること。

問五 傍線部③「うちのあれ」とは何ですか。文中から抜き出しなさい。

問六 空欄 ④・⑥ に当てはまる語を、文中からそれぞれ五字以内で抜き出しなさい。

問七 傍線部⑤「おれにとつて、これが最後のよさこいや」と対照的な意味合いを持つ一文を探し、はじめの五字を抜き出しなさい。

問八 傍線部⑦「もう一日」とは何のことですか。文中の一語を抜き出しなさい。

受験番号
氏 名

得 点

小 計

—

問一	イ	口	られ	ハ	んだ	ニ	ホ
問二	A	B	C				
問三							
問四	最初			最後			
問五							
問六							
問七							

という先入観。

小 計

二

問一	イ	しい	口	まった	ハ	ニ	ホ	み
問二	A	B	C	D				
問三								
問四	(I)			(II)				
問五								
問六	④			⑥				
問七								
問八								